



平成二十七年一月 第三号

© 2014 雅友会

9月5日の軌跡

鹿児島教区 雅友会会長 島見教信

例年、9月5日は鹿児島別院において【さつま開教記念法要】がお勤まりになります。この御法要は鹿児島教区にとりまして、特別な御法要で殊更に大切に勤めていかなければならないご法要であるといえます。

これまでは別院中心に勤修され、別院や出張所の先生方が出勤されておりましたが、雅友会としてもこの御法要を大切にしたいとの思いにより、昨年より奏楽出勤させていただきました。

御法要の際、皆で正信念仏偈を拝読する中で、先人たちのご苦勞を考えてみると胸が熱くなる瞬間がありました。300年という長きにわたる念仏禁制の時代、厳しい弾圧の中で先人達はいかなる心境で耐え忍んでいかれたのか、いかなる心境でその時を乗り越えられたのか。史実はありますが、どんなに思いを巡らせても、ご苦勞は如何ばかりだったのか想像もできません。ただ、有り難いことに、今ここに確かにお念仏が相続

されております。私たちのご先祖方がいのちがけで守り伝えてくださったお念仏がここにあります。この口にあります。これこそ先人達の軌跡でありましょう。

この地に開教が赦免されたのが明治9年、開教当時のもとより、今日に至るまでの歴史の中で法灯を受け継ぎながら、ご法縁を伝え広めていった先達の僧侶やご門徒に頭が下がるばかりです。

さて来年の平成28（2016）年はさつま開教140周年をお迎えいたします。教区一丸となり御法要に向け取り組み、また雅友会といたしましてもしっかりと勤めできるような日々精進させていただき、また御法要に向けて様々な活動を展開していきたいと考えております。

私が手前勝手に望みますならば、例年教区全体で出勤できるような御法要にしていききたいものであります。

いよいよ法要まであと1年半、教区全体で盛り上げてまいります！



小野功龍先生を偲んで

揖宿組光雲寺

雅友会元会長 佐藤一洋

天王寺楽所雅亮会楽頭・元理事長小野功龍先生が26年8月末に77歳でお亡くなりになった報を見かけ、雅友会の末席のものとして寄稿します。

明治の廃仏毀釈後、宮廷（京都）・南都（奈良）・天王寺の三方楽人は東京に集められ、天王寺楽所解体の危機が訪れたそうです。その時大阪願泉寺住職小野樟蔭氏は民間や旧楽人を集めて「雅亮会」を設立し、天王寺流の再興継承を図り、今日四天王寺の聖霊会に代表される演奏団体として維持されてきました。

私が勤式研究生のころ、御正忌報恩講の御座前吹き合わせの時間、一人の年配者が部屋に入ってこられました。それまで知堂さんが座っていた鞆鼓の席に座るやいなや緊張が走り、合奏が始まるや時折「もつとりリズムよく」といった指示が出ました。何も知らない私など「誰なんやこのおっさんは」ぐらいでしたが、後で雅亮会楽頭小野撰龍氏（樟蔭氏の子）であったことを知りました。

昭和57年4月、鹿児島別院の再建工事も終わり、賑々しく落慶法要が6日間にわたって両門様ご出座の下修行されました。併せて記念行事も多く計画され、その中「仏教音楽の夕べ」を中央公民館で、4部構成（雅楽・声明・インド舞踊・仏教讃歌）にて開催することになり、当特別院職員でありましたので朝のお晨朝から夜遅くまでの準備と走りまわされたものでした。その“夕べ”に



功龍先生は1955年創立の、1966年遷都の天王寺楽所を継承し、長年にわたり雅友会を指導された。雅友会元会長、前雅友会理事長、第一音楽大の音楽学部長、京都府立総合文化センターの音楽学部長、2013年雅友会楽頭職を継承し、2018年雅友会元会長職を継承された。

Shokoku Magazine No. 20180303 ver.1.0

声明の村上智真氏、そして鞆鼓高橋法昭・龍笛高橋静龍・箏篳大八木正澄・鳳笙小野功龍（樟蔭氏の孫）各先生方においていただき、雅友会を指導して頂きつつ“夕べ”が開催されたのでした。もちろんその前後の法要もご奏楽をさせていただき、雅亮会の主管方と一緒に奏楽をするという夢のようなひと時を過ごしたことでした。

小野功龍先生はその後楽頭となられ、ヨーロッパ公演等も成功され雅楽の発展はもちろん、宗門の仏教音楽儀礼研究所長等を歴任されました。

私はその後一度だけ勤式指導員の研

修会で上山した時、ご講師としての先生にお会いしました。こんな田舎者のことはもうお忘れだろうと思っていましたら、ニコニコしながら「いや久しぶりですね」とお声をかけていただいたことが忘れられません。

2013年度の日本芸術院賞の授賞式が7月に東京であり、その一か月後にお亡くなりになったとのことでした。

無常のことわりをあらためて教えられ、

「哀婉雅亮」

アワレミ スミ タダシク サエタリ
と鳳笙の音が響きとどいてきます。

ボウズ ミーツ フェス
BOONZ MEETS FES

舞楽担当 高岡宏信

一昨年、親鸞聖人750回大遠忌法要の記念行事の一つとして開催された

「BOONZ MEETS FES」が昨年開催されました。若い世代の人たちにかにかにお寺を身近に感じてもらうかのコンセプトで企画された行事です。

本堂内には特設ステージが設けられ、様々なアーティストらの演奏やフアッシュョンショー、ラジオ番組の生放送等がありました。境内地にはマルシェ、念珠作り、ネイルサロンの他様々なお店が出店し、この日別院は老若男女問わず活気に溢れました。

我々雅友会も前回に続き出演の機会を与えて頂き、今回は舞楽を披露致しました。会員相互の研鑽として始めた舞楽。舞台もすべて会員自ら制作し、試行錯誤の連続でしたが何とか形にすることが出来ました。

今回披露した演目は、舞楽「陵王」。勇壮な走舞の代表曲で、目にも鮮やかな朱色の装束に毛縁の袴襦（りょうとう）を身にまとい、極彩色の龍を象った黄金の



仮面を被って、手に持った桴を振りかざし舞台上を勇壮に舞います。

数ある舞楽の曲目の中でも私が最も好きな曲の一つでもあります。華麗な装束をまとい、軽快なテンポで舞う姿もさることながら、興味をそそられるのはこの曲の由来であります。この舞のモデルとなった人物、古代中国の南北朝時代、北齊蘭陵群の王・長恭は才知武勇の王でありました。ところがこの王はあまりにも美しく戦場で威令が及ばないため、その美しすぎる美貌を隠すため恐ろしい龍の仮面を被って全軍の指揮に当り戦

いに挑みました。その戦勝の様を表したのがこの舞の由来です。

そこで私はそんな姿を想像しながら仮面を被り舞います。その美しすぎる美貌を隠すために…。そうです、なりきるのです。と、我々も楽しみながら演奏しております。

お陰様で雅友会の活動も色々な方に知ってもらえる様になりました。まだまだ反省すべき所は多々ありますが、多くの方に舞楽を知ってもらおう、何より舞楽ってすばらしいと思っ頂けるようにこれからも活動を続けてまいります。



年賀欠礼に想う

東隅組願成寺 藤 清道

新しい年が始まりました。昨年のごことを振り返りながら、今年の努力目標を掲げているところでありませう。今年こそは、メタボ検診に引っかけられないように……

さて、新年を迎えるの楽しみに年賀状があります。日頃なかなか連絡を取ることのない旧知の人からの年賀状であったり、日頃お世話になってる方からの年賀状であったりと様々ですが、時に年賀状を出した相手から、「実は昨年、誰それが亡くなりまして」と、年賀欠礼の葉書をいただき、「あ、そうだったんだ……」ということもたまにあります。多くの場合は、年末の12月上旬ごろに年賀欠礼の葉書をいただくことが多いです。私がもらった年賀欠礼の葉書の中には、忘れられないものがあります。

2年前の12月に、1通の年賀欠礼葉書をもたらしました。差出人は後輩のお母さんでした。つまり、亡くなったのは後輩。お母さんは、自分の息子がもっていた年賀状を一枚一枚確認し、年賀欠礼の葉書を送ったのでしよう。その葉書には、元気なころの後輩の写真が貼り付けら

れていました。印刷ではなく、写真を切り取り、わざわざ葉書に貼り付けてあったのです。後輩のお母さんの、「息子のことを忘れないでちょうだいね……」という気持ちが感じ取られ、後輩が亡くなったという驚きと相まって、涙があふれてしまいました。

私たち人間世界は、お釈迦様のお示しのとおり、“一切皆苦”の世界であり、また親鸞聖人は“生死の苦海”とお示しくださっています。どんなに不憫に思っても誰一人その苦しみや悲しみを代わってあげることができませんし、また代わってもらうこともできません。わが子に先立たれた、後輩のお母さんの苦悩は、如何ほどか想像することさえできません。

親鸞聖人はご和讃に、

『如来の作願をたづぬれば

苦悩の有情をすてずして

回向を首としたまひて

大悲心をば成就せり』

(『正像末和讃』註釈版p.606)

と、お示しくださっています。阿弥陀さまのご本願は、このような苦悩にうめき、悲しみに涙するもののために建てられたのであります。それは、「あなたがどんなことになるうとも、この私だけは

見捨てることはない、捨てることができないう、救わずにはおれない」という阿弥陀さまの大慈悲心であります。ほかの誰が忘れても、この仏さまだけは忘れてくださらないのです。また、苦悩の私たちを必ず救うと誓われた阿弥陀さまのお呼び声がお念仏であります。苦しいことや悲しいことがあっても、「そうそう、私一人ではない、阿弥陀さまがいてくださる。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と、阿弥陀さまのお慈悲をよろこびながら、お念仏申す人生をとともどもに送らせていただきます。

『常に居ますを佛という

此処に居ますを佛という

共に居ますを佛という

この佛を南無阿弥陀佛という

このいわれを聞いて

歡ぶを信心という

称えて喜ぶを念佛という』

岩本月洲師

合掌

★雅友会へのお問い合わせ

鹿児島教区教務所内 雅友会事務局

099-222-0051 (担当 井川)

雅友会ホームページ (鹿児島別院ホームページ内)

<http://www.hongwanji-kagoshima.or.jp/gayukai>